

ジャックと豆の木

大分大学教育学部附属幼稚園（文責／園長 石川照代）



温かい応援ありがとうございました!

台風の影響で、やむなく延期した運動会。ご迷惑をお掛けしましたが、今回ばかりは「子どもファースト」で決断させて頂きました。当日はさすがにお天気も良く、子どもたちは楽しく元気にいっぱい「遊ぶ姿」を見せてくれました。前日準備から、当日の温かい応援、片付けのお手伝いにといたるまで、ご支援ご協力頂き誠に有り難うございました。心より御礼申し上げます。

子どもたちは、これからしばらくは運動会の余韻に浸って遊び続けるでしょう。そして、バス遠足や「秋の贈り物」に刺激を受けて、また新しい遊びに浸っていくのだらうと思います。

【運動会の一コマ】



● 年長さんは勝負への出陣の準備が済み、力強い走りを見せてくれました!

● 2匹のありさんの気持ち揃わなければうまく運べないんです! 本番までには紆余曲折あったんですよ!



● 緊張の瞬間に挑むことになりました! 大役を担った年長さん! みんなの代表として立派に活躍してくれました!

● 玉を投げるときの動きは、非日常的なもので、意外と難しいですね。ぐんと上手になりました。



仏様の手と幼稚園の運動会

私が大変尊敬している教育者の一人に、国語教育の大家、故大村はま先生がいます。大村先生は、長年国語の教師として中学校や高校で教鞭を執られていましたが、子どもたちに確かな言葉の力を付けるために、生徒一人一人に合わせた教材を準備し、授業されていたそうです。その大村先生の著書に「灯し続けることば」(小学館)二〇〇四年)というのがあります。その中の一節は、私にとつての「灯火」でした。紹介します。

私が若い頃、奥田正造先生から聞いたお話です。「ある時、仏様が道ばたに立っていらつしたと、一人の男が荷物をいっぱい積んだ荷車を引いて通りかかった。ぬかるみがあって、車はそれにはまってしまい、男が懸命に引っ張っても抜け出せない。男はびしょりになって苦しんでいる。仏様はしばらく男の様子を見ていらしたが、やがてちよつと指でその車に触れられた。すると車はすつとぬかるみから出て、男はからからと車を引いて去っていった」というお話です。

奥田先生は、「こういうのが本当の教師なんだ。男は仏様の力にあずかったことを永遠に知らない。自分が努力して、抜け出したのだという自信と喜びを持って、車を引いていったのだ」とおっしゃいました。このお話は、日が経つにつれ、私にとつて深い感動となりました。

もし、仏様のおかげと男が知ったら、ひざまずいて感動したでしょう。それも喜びだとは思いますが、男が一人で生き抜いていく力にはならなかったでしょう。一人で生きていく自信、真の強さにはつながらなかつたのではないかと思うのです。

私が子どもを教え、そのおかげで力がついたとわかれれば、子どもは感謝するでしょう。でも、「おかげ」と思っているうちは、本当にその子の力になっているのではないのです。

生徒が、自分の力でがんばってできたという自信から、生きる力を身につけるように仕向けていくことが、教師の仕事なのだと思えます。(線石川)

「生徒」を「子ども」、「教師」を「保育者」と読み替えてみました。すると、「仏様の手」のように子どもを育てること、これは幼児教育の現場で最も大切に行っていることに通じるのではないかと、「幼児教育は教育の原点」とよく言われるが、それはこのことではないかと思つたのです。

運動会の「遊び」を子どもたちと創り上げていく過程で、先生方はこの「仏様の手」のようにありたいと奮闘していました。子どもたちが自分たちで成し遂げた喜びを得られるようにと、かける言葉一つに心を砕いていたことを知る者はいません。終わつた後、本当にあれで良かったのかと苦悶することに気づいてくれる人もいません。でも、大村先生なら、「それが教師(保育者)の仕事というものよ」と仰るのだらうと思います。